第18回 備える

ドクターヘリ 被災地に急行

能登半島地震で活躍

道路寸断 片道30分で傷病者搬送

最大震度7の揺れが襲った能登半島地震では幹線道路が寸断し、多くの集落が孤立した。陸路で被災現場にたどり着くのが困難な中、一刻を争う重度の患者の搬送や救命治療に活躍したのが、ドクターヘリだ。過去の地震災害を教訓に国内で導入が広がり、災害時には欠かせない存在になっている。（平井良信）

地震発生翌日の1月2日、夜明けとともに1機のドクターヘリが愛知県長久手市の愛知医科大病院を飛び立った。災害医療研究センター長の津田雅庸医師(51)と看護師を乗せたヘリは小松空港を経由し、まだ被害の全容が分からない能登半島へと向かった。

午前9時ごろ、最初に降り立ったのは石川県能登町の宇出津総合病院。被災直後で検査や治療がままならない病院で、倒壊した家屋から救助された親子2人が搬送を待っていた。

父親と息子ともに外傷がひどく、「一刻も早く治療ができる病院に運ぶ必要があった」と津田さん。応急処置を施し、約120㌔離れた金沢市の県立中央病院へ一人ずつヘリで搬送。道路の寸断や渋滞で陸路では半日近くかかるところを片道30分ほどで到着し、適切な医療につないだ。

息つく間もなく、午後には孤立状態にあった珠洲市大谷地区の避難所から要請があった。途中、至る所で道路が土砂で埋まり、住宅の3軒に1軒ほどが全壊しているのが上空から見えた。「思っていたよりも、ずっと被害はひどい」と胸騒ぎがした。

到着した避難所には、まだ消防など救助の手が入っていなかった。がれきに足を挟まれてクラッシュ症候群（圧迫された部位から毒性物質が全身に回る症状）の恐れのある学生や、低体温症の高齢者らを診察。衰弱状態にあった生後2カ月の赤ん坊はすぐに治療が必要だったため、ヘリで県立中央病院へ搬送した。

今回の地震では、石川県と協定を結ぶ愛知や岐阜、静岡など中部の各県がドクターヘリを派遣した。ドクターヘリによる素早い初期治療の開始は、救命率の向上だけでなく、予後の改善にもつながる。津田さんは「今回の地震では陸路でのアクセスが遮断された地域が多かった。空から現場に急行できるドクターヘリの機動力を発揮することができた」と振り返る。

能登半島地震で患者の搬送に当たったドクターヘリを背に、活動について話す愛知医科大の津田雅庸災害医療研究センター長＝愛知県長久手市の愛知医科大病院で

国内のドクターヘリは2001年に本格運用が始まり、現在は全国47都道府県に57機が配備されている。過去の地震災害を教訓として、普及や運用ルールの整備が進んだ。

導入の機運が高まったのは、1995年1月の阪神大震災。ドクターヘリの普及を目指すNPO法人「救急ヘリ病院ネットワーク（HEM-Net）」の篠田伸夫会長(80)は「発生当日にヘリで搬送された患者はたった1人。医療関係者は大変なショックを受けた」と振り返る。

篠田さんは「普段から飛んでいないと、いざという時に飛べない」と法制化を国に働きかけ、2007年に特別措置法が成立した。

11年3月の東日本大震災では、全国に配備された26機のうち18機が被災地に駆けつけた。

だが、当時はまだ災害時の運用ルールがなく、活動の指揮命令系統も一本化されていなかった。警察や消防など他機関のヘリとの連携も不十分で、別々の機体が同じ現場で鉢合わせすることもあった。

その後、厚労省から16年に大規模災害時の運用指針が各都道府県に示された。

今回の能登半島地震では、災害派遣医療チーム（DMAT）調整本部内にドクターヘリ調整部が置かれ、各機関との情報共有や連携に当たった。厚労省によると自衛隊や警察、消防などのヘリと効率良く連携し、孤立した集落や病院から1日に2001人以上を安全な地域に運んだ。愛知医科大の津田さんは「これだけの数のヘリが活動したのは初めてだと思う」と話した。

阪神大震災 普及の契機に

2016年 大規模災害時の運用指針

藤田医科大病院のドクターヘリ。能登半島地震で医師や患者の搬送に活躍した＝同病院提供

中部9県に12機導入

2月1日に愛知県に2機目となるドクターヘリが藤田医科大病院へ同県豊明市）に配備され、中部9県に導入された機体は計12機となった。平時はいち早く県内の患者の元に駆けつけて救命率の向上に努め、南海トラフ地震など大規模災害に備える。

藤田医科大病院に配備された機体は大型で人工心肺装置「ECMO（エクモ）」を載せられ、患者を搬送しながら治療できる。救急総合内科教授の岩田充永医師(50)は「高度な医療機器を搭載し、災害時の広域搬送にも対応できる」と話す。

一方、課題は霧や雪、強風など悪天候時は出動できないこと。基地病院によって異なるが、運航時間は午前8時半～日没。夜間は飛行できず、医師や看護師が同乗するドクターカーで対応している。

中部9県のドクターヘリ導入状況

ドクターヘリ 消防の要請に応じて医師や看護師を乗せて傷病者の元へ駆け付け、救命治療や搬送に当たるヘリコプター。心電図モニターや自動体外式除細動器（AED）などの医療機器を積む。都道府県が導入し、救命救急センターのある基地病院が運営する。パイロットや機体の整備は運航会社に委託し、1機当たり約2・5億円。2022年度の出動数は2万9245件。

繰り返す地震 町に爪痕

災Seeing さいとシーイング

▶30◀ 南海トラフ（愛知県豊橋市）

㊀東南海地震の犠牲者の魂を慰める石像と、石像を紹介する羽田野特任助教＝愛知県豊橋市の龍拈寺で
㊁安政東海地震の様子を描いた絵馬＝愛知県豊橋市の御厨神社で

南海トラフ地震で大きな津波や揺れの被害が予想されている愛知県豊橋市。過去に南海トラフで発生した宝永地震（1707年）や安政東海地震（1854年）、昭和東南海地震（1944年）などでも繰り返し被害に遭い、市内には今もその痕跡が残る。

太平洋側に面した海岸から1㌔ほど内陸にある御厨神社の拝殿には、大きな絵馬が掲げられている。安政東海地震の様子を描いたもので、沿岸部には生えない松の木の根元に波が迫っている。「内陸まで津波が達したことがうかがい知れる」と鈴木賢一郎宮司(66)は話す。神社は当時、今より約800㍍海岸寄りにあり、津波が近くまで迫ったことから、現在の所に移転した。

JR豊橋駅から約1㌔東にある龍拈寺には、東南海地震で建物倒壊の犠牲になった女学生の魂を慰める観音像がある。境内にある市指定有形文化財の山門は、近くの看板で「宝永の大地震で傾いていたものを修復した」と紹介され、地震の記憶を伝える。

「町中の災害の爪痕から、どんな被害があったかを知ることができる。災害は繰り返し起こるので、どのように自分の命を守るか考えてほしい」。名古屋大減災連携研究センターの羽田野祐教（ライフライン防災）は警鐘を鳴らす。（城ノ愛麻）

CBCテレビによる動画はこちら

次回の「備える」は3月4日の予定です。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています